

この經典を、その形式や内容の上から考へて、果して或る原典から忠實に譯出したものと認め得られるか否かを攷究して見ることは、必ずしも企及すべからざる難事であるとは思はない。

まづ經典の形式について考へて見ると、これが一見して佛典のそれを模倣したものに過ぎないことは、何人も首肯する所であらう。或は道教の經典の形に眞似たものではないかとも考へられようが、唐代の道教經典もまた佛典の形式の模倣に外ならないから、要するに此の經典の形式は佛典のそれに倣つたものと見て差支ない筈である。此の點から見てもこれが原典の忠實なる譯述であらうとは考へ得られないが、然もそれは單なる外觀に關することであつて、根本的にこれが譯述であるか否かを觀定めるに足る重要點ではない。これが爲には進んでその内容について考へて見なければならぬ。

さて本經の内容を檢討するものは、これがメシヤとシモン・ペテロとの間に行はれた安樂道に達するについての問答であるといふに係はらず、まづ餘りに老子道德經に説く所と相近いのに一驚を喫せざるを得ないであらう。その所説の要諦は、前に述べた所からも知り得る如く、要するに人の安樂を得る道は、動・欲を除いて無欲・無爲・無徳・無證の四法を得るにありとするのであつて、諸種の譬諭を用ゐてその説明を助けたものに外ならぬ。此等の諸法が道德經五千餘言の中に説かるゝ重要義であることは、今一々取り立てゝ證明する程の要は無いが、逆にこれが基督教に於ても然く根本義として説かるべき性質のものであつたであらうか。勿論聖書の中に説かれた所には、此等の四法に該當せしむべき條が無いではないが今僅かながら自分の知る所では、特に此等の四法を以て人の迷惑を救ひ、安樂を得せしむる道であると説いた所はないやうである。對觀福音書を始め彼得前後書の類などに、メシ